

デジタル・アーカイブズと歴史理解および歴史研究¹

アジア歴史資料センター長

平野 健一郎 ひらの・けんいちろう

1. デジタル・アーカイブとしての アジア歴史資料センター

アジア歴史資料センター（以下、「アジ歴」と略称）は、国の公文書をデジタル公開する日本で初めてのデジタル・アーカイブです。2001年に国立公文書館の一機関として発足しましたが、設立が提案されたのは1994年でした。当時の村山富市首相が、日本人が近隣諸国との戦争の歴史を正視することができるように、また、国際的にもより正確な歴史理解を通して国際的な相互理解を推進することができるようにと、設立を提案したものです。その後、1999年の閣議決定によって、「近現代の我が国とアジア近隣諸国等との関係に関わる歴史資料として重要な我が国の公文書及びその他の記録」と定義されたアジア歴史資料をアジ歴に収集し、公開することが定められたのですが、設立までの過程で、アジ歴は資料をデジタル形式で提供することになりました。こうして、爾来10年、アジ歴はアジア歴史資料のデータベースを構築し、それを広く世界に発信していくデジタル・アーカイブとして発展してまいりました（資料1参照）。

現在、アジ歴の利用者は約2,500万画像にアクセスすることができ、この数は現在も増え続けています。これらの画像は、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所の3館から提供されています。アジ歴はデジタル化した資料をオンライン上で利用できるようにするだけでなく、多言語による広報活動や、歴史資料を所有する他機関との連携も行っています。また、オンライン上で特別展や特集を組み、資料により親しみやすくするとともに、資料の背景にある文脈を調べることができるような工夫もしています。こうした活動を通じて、アジ歴は、日本とアジア諸国の人々や研究者が相互の歴史の理解を深めていけることを願っています。

はじめに、アジ歴のデータベース・システムがどのように機能するかがわかっていただけのエピソードをご紹介します。私のアメリカ人の友人にサウス・カロライナ大学で日本近現代史を教えている人がいます。彼は、研究のために短期、長期によく日本を訪れるのですが、10年ほど前でしたか、「モリヤ・コウユウ」という名前の日本人男性について調べる方法はないかと尋ねてきました。この友人によれば、モリヤ（森谷幸勇）は陸軍士官で、アメリカに留学経験があるといえます。というのは、友人の大伯父のチャールズ・フラー（Charles Fuller）はマサチューセッツ工科大学教授だった人物で、その子孫がモリヤからの手紙を所持しており、その手紙にはモリヤがフラー教授の指導に感謝する旨が記されているといえます。フラー教授の子孫たちは手紙と贈物の



資料1 アジ歴トップページ

送り主である人物についてもっと知りたがっていて、友人が私に助けを求めてきたのですが、当時は、私にできることはほとんどありませんでした。

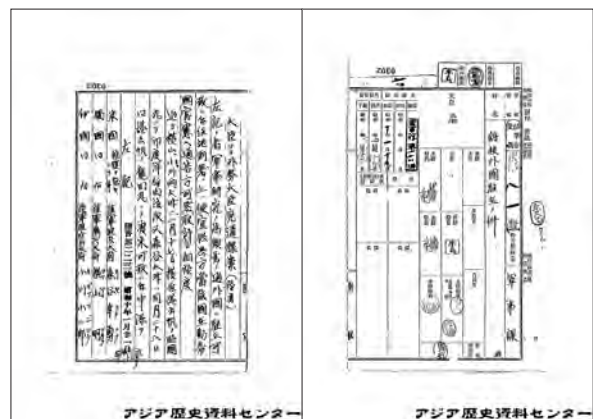
10年ほどたった今年、また友人が東京を訪れ、私に同じことを尋ねてきました。私は帰宅してアジ歴のホームページを開き、キーワード検索ボックスに「森谷幸勇」と入力し、「とにかくやってみるだけやってみよう」とボタンをクリックしてみました。驚いたことに、クリックするやいなや、森谷の手掛かりとなる資料が4つも現れたのです(資料2参照)。大喜びでそれらの資料を見ますと、確かに森谷幸勇という陸軍砲兵大尉がいて、1935年に2年間の予定でアメリカ留学に派遣されていたのです(資料3参照)。翌年、アメリカに滞在中の森谷は、日本軍の資材整備視察団が訪米する際のアテンドを命じられました(資料4参照)。6年後、森谷は陸軍大佐に昇進しており、第二次世界大戦中に南方で押収された弾丸の調査を指揮し、報告書を提出していました(アジ歴レファレ

ンスコード：A03032052200参照)。彼は明らかに砲兵部門で指導的役割を果たしており、おそらくMITに留学した前歴に負うところもあったと思われました。しかし、最後に私が読んだ資料は、陸軍大臣が森谷陸軍少将に特別賞与を与えることを命じるものでした。1943年6月に森谷が危篤に陥ったためでした(アジ歴レファレンスコード：A04018710900)。

私がすぐに資料の発見を友人に知らせたことはもちろんです。友人も大喜びで、この発見を親戚中に知らせると言っていました。私はこの発見でアジ歴を、そして自分のアジ歴との関わりを誇らしく思った次第です。



資料2 キーワード「森谷幸勇」の検索結果

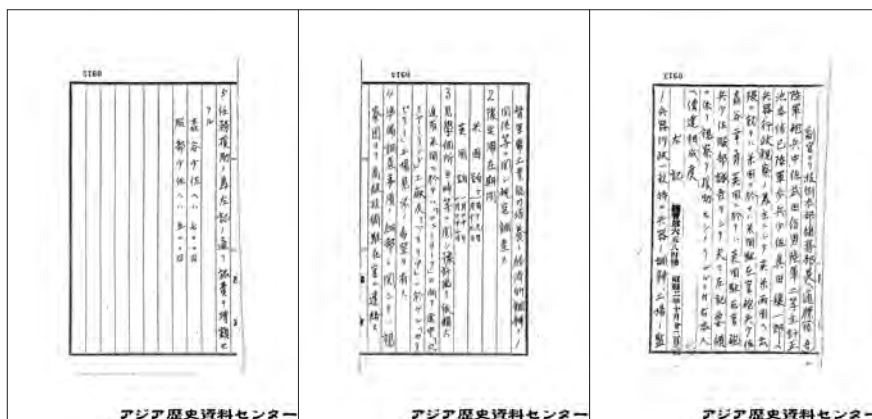


資料3 件名：将校外国駐在の件

レファレンスコード：C01006606200

上記資料中、1画像目(右)と2画像目(左)

森谷幸勇陸軍砲兵大尉が昭和10年2月28日に横浜港出帆の滝田丸にて渡米し、2か年の留学をする旨が記されている。



資料4 件名：資材整備使節団援助に関する件 レファレンスコード：C01006744800

上記資料中、2画像目(右)、3画像目(中央)、4画像目(左)

兵器行政一般を視察する目的で訪米した陸軍砲兵中佐らを米国駐在官砲兵少佐森谷幸勇に援助させる旨が記されている。

アジ歴データベースがこのように機能するのは、先に述べた3館から約170万件、画像数にして約2,500万画像を1か所に集めてきたからですが、アジ歴が3館でそれぞれ整理されている資料の情報を系統的にまとめ、統一的な形式の目録情報を付与しているためです。これにより3館のどれ一つ訪問することなく、3館が所蔵する資料を一括で検索対象とすることができ、それらの資料の中から必要とする文書を探し出すことができるのです。森谷に関する4つの資料のうち、2つは原資料が防衛省防衛研究所にあり、残る2つは国立公文書館にあります。アジ歴では、上述の通り、統一的な目録情報を整備する際、すべての文書の冒頭300文字をテキスト化して目録情報に加え、それら300字の中に含まれる情報も検索対象としています。この冒頭300字をテキスト化して検索対象に加えるという方法は、アジ歴で独自に考え出したものです。私の知るかぎり、一般的なデータベースですと、検索の対象となるのは主に資料タイトルのみですが、アジ歴の検索システムではより広範な検索が可能となるわけです。森谷は国際舞台で重要な役割を果たした人物とは必ずしも言えませんので、その名前が資料のタイトルに含まれる可能性は低く、実際、私が見つけた4つの文書も、資料件名に彼の名前は含まれておらず、冒頭300字の中にその名前があったために、森谷関連の文書をキーワード検索によって見つけることが可能になったのです。私たちが彼を見つめることができたのは、アジ歴データベース独自の目録情報と検索機能のおかげにほかなりません。

このエピソードでは、アメリカの友人と私は個人的な目的でアジ歴データベースを利用しています。一方、私たちは二人とも歴史研究者として、専門的にアジ歴のデータベースを仕事や研究のために利用しています。概して、アジ歴データベースの利用者には専門的な歴史研究者と一般の利用者という2つのグループがあります。アジ歴が設立以来目指してきているのは、まさに歴史研究者による歴史研究の推進と、一般の人々の歴史理解

の促進です。これらの2つをはかることで、日本国内だけでなく国境を越えて、国際的な理解が深まっていくことを目指しています。

20世紀から21世紀にかけて、私たちは異なる歴史解釈を如何に橋渡しするかという問題、すなわち歴史認識問題に直面しています。歴史認識問題とは、要約しますと、国によって異なる軌跡に向かい合いつつ、歴史をどう理解するかという問題です。国々の歴史が複数あることをお互いに理解することができたとしても、歴史認識の相違という問題はなくならないのではないかという疑問は残されたままかもしれません。この疑問を少しでも解くためには、まず、歴史理解がどのように形成されるかを考える必要があるでしょう。歴史理解というものは、第一に生じた事実に、第二に記録に、第三に経験や記憶に基づいて形成されるというのが私の基本的な理解です。問題は、記録と経験や記憶というものが個人間だけでなく、国ごとにも異なることです。

2. 歴史理解の促進

歴史に興味を持つ一般の人々は、主として自分たちの個人的な経験や記憶から事実を構成して、意見を形成します。問題は、経験や記憶が人によって大いに異なる可能性があることです。そうだとしますと、人によって歴史事実の認識が大きく異なってくるのは当然と考えられます。デジタル・アーカイブズの役割は、個々人が自分の経験や記憶に結びつけて歴史の事実を認識しようとするときに、よりよい歴史事実の理解を得られるように、記録の作成・整理・保管・公開によって支援することにあると思います。しかし、次の問題は、遺されている歴史の記録自体が国によって異なることが多いということです。アーカイブズというのは、多くの場合において国の機関であり、国によって相当に異なる記録を保存しています。としますと、アーカイブズが歴史記録を保存し、公開しているというだけでは、異なる歴史認識が生じるのを避けることはできないのではないかと思います。

要するに、歴史事実の知識を共有すれば、共通の歴史認識に導かれるというのは単純すぎるでしょう。結局、歴史事実を形成する根拠となると考えられている歴史記録は、特に国際的な歴史の分野が問題となるときには、きわめて多様です。しかし、それでもなお私は、私たちは歴史の記録を共有することによって、人々の間で国際的な相互理解を深める可能性に近づくことができると信じています。

アーカイブズは公的な記録（公文書）を専門の歴史研究者だけでなく一般の人々に向けても公開し、しかも、国境を越えて公開します。歴史研究者は、すでに相当な期間にわたり国際的なクロス・アーカイヴァル・リサーチを実践し、歴史理解のために大きな進展を成し遂げています。今日では、一般の人々でも、意志があれば、デジタル・アーカイブズによって外国のアーカイブズに入ることが可能になりました。実際、他の国々がそれぞれの歴史記録を保有していると知るだけでも、別の歴史記録が存在するというを理解することにつながるでしょうし、そのことが国際的な歴史理解の可能性を高めるでしょう。今日では、デジタル・アーカイブズのお蔭で、一般の人々も、他の国の人々が異なる歴史記録を持ち、それが異なる歴史事実、そして異なる歴史理解をもたらすであろうことを理解することが以前よりも容易になっています。

昨年、日本ではNHKが日露戦争をテーマとした歴史ドラマ・シリーズを放映しました。ドラマ放映中や放映後には、アジ歴特別展への利用者アクセス数が目に見えて増加しました。テレビの歴史番組に触発され、人々が歴史の記録と歴史の事実に目を向けるようになりました。その中には、テレビで放映された物語がアーカイブズに記録されたものと同じではないことを発見した人たちもいたことと思われます。当時の状況のど真ん中で担当者が起草し、残した原資料を読むことによって、人々は、歴史の後知恵ではなく、なぜ、どの

ように担当者がこの決定、あの決定をしたのかを探ることになり、そうして歴史人物に同情や共感を持つことで、歴史の記録資料に基づいた、より深い歴史理解を形成するのではないのでしょうか。デジタル・アーカイブズは歴史理解を深める新たな地平線を、しかも国際的に、拓いたといえるのではないかと思います。

3. デジタル・アーカイブズの歴史研究への貢献

他の地域と同様にアジアにおいても、歴史研究者のグループが国境を越えて何年にもわたって共通の歴史を書くための共同作業を続けてきています。その努力の過程や成果について語る時間の余裕はありませんので、一般的な言い方にとどめますが、過去には国民の歴史を書くだけであった歴史研究者にとって、国際的な共通の歴史を書くことは難しいであろうと思います。しかし、その挑戦を引き受けてきた歴史研究者たちは、歴史資料を共有し、異なる国々の記録を公開することには大きな寄与をしてきました。

デジタル・アーカイブズを通じて歴史的なデータへのアクセスの可能性が急速に増大すると、歴史研究が容易になることは言うまでもないところです。原資料にこだわる歴史研究者たちは、最近までデジタル・アーカイブズの使用を隠していました。しかし、彼らも今日では、アジ歴データを参照したり、引用したりすることを公表するようになっていきます。それどころか、アジ歴は今や、多くの歴史研究者によって歴史研究に有用なある種の「国際公共財」とみなされるようにさえなっています。

歴史研究に対するアジ歴の最も特筆すべき貢献は、すでに述べたように3館が所蔵する資料の目録情報が統一的に整理され、それらの資料を一括で検索できることです。たとえば、防衛省所蔵資料から失われたと考えられていた海軍文書が、最近になって国立公文書館所蔵資料の中から発見さ

れましたが、これもまたアジ歴独自の目録情報と検索機能の成果です。アジ歴データベースが持つ独自の目録情報と検索機能が、これまで膨大な歴史記録の中に埋没していた歴史事実を新たに発見することを可能にするのです。今後、アジ歴を始めとする歴史資料データベースは、歴史研究に新しい領域と方向性を拓くものになると思います。

デジタル・アーカイブズがなしうるもう一つの貢献は、歴史研究の民主化です。第一次史料を選ばれた一握りの人たちが独占するかわりに、デジタル・アーカイブズは一般の人々にすべてを公開し、閲覧や考察に供します。政府文書がこのようにアクセス可能となり、透明性を持つことは、そのこと自体が市民を助けることになるでしょうが、容易にアクセスできる歴史資料が一般の人々に開かれれば、コンピュータによるアクセスを持つすべての人にとって歴史資料が身近なものになります。このことと、最近、日本で歴史への興味が高まっていることとはおそらく無関係ではないかもしれません。デジタル・データによって、専門的な歴史研究者も一般の歴史愛好家も、今までよりもずっと容易に歴史研究に引用されている資料にアクセスすることができるようになっていすから、ある歴史研究者の解釈に疑問が生じた場合には、誰もが原資料に当たることできるようになったのです。

歴史の民主化に加え、デジタル・アーカイブズは歴史研究をより科学的なものにもすると思います。歴史研究者はかつては特権階層で、歴史資料を独占し、そうすることで歴史解釈をも意のままにしてきました。しかし、今や、デジタル・アー

カイブズは歴史研究者がそのような特権を持つことを不可能にしています。デジタル・アーカイブズを一般の人々が広く利用し、また、歴史研究者同士の相互評価が開放的になることにより、歴史研究はより民主的なものになるばかりか、より科学的なものにもなる、このことこそが今日のデジタル・アーカイブズの最大の貢献であることを強調したいと思います。

4. おわりに—アジ歴の今後の課題

これまでの最初の十年間、アジ歴は日本における指導的なデジタル・アーカイブズの位置を維持してきました。しかし、今年、次の十年に入ったところで、アジ歴は求められる役割を果たすためにさまざまな課題に直面しています。アジ歴は、人々がよりよい歴史理解と国際理解を獲得するのに役立つよう最善を尽くすために、依然としてデータベースと利用者基盤の両方を拡大することを目指しています。データベースの信頼性は、データがどれほど網羅的であるかによりますので、アジ歴はデータの提供者、すなわち、中央及び地方の行政機関のアーカイブズ、その他の公的アーカイブズとさらに密接に連携する必要があります。私たちは原資料データをできるかぎり早く、正確に、広範に整え、そしてそれらを早く、正確にデジタル化し、利用の便宜を増すために、さまざまな組織と連携しなければならないと考えています。アジ歴はまた、歴史研究と歴史理解を促進するために、デジタル・アーカイブズの国際的なネットワーク作りにぜひ参加したいと考えています。これらの主要な課題を果たすために、アジ歴は国際公文書館会議（ICA）に指導的な支援を仰ぎたいと願っております。

¹ 本稿は、オーストラリア・ブリスベンで開催された国際公文書館会議（ICA）の2012年大会における英語による発表の日本語原稿である。